

釈迦族の起源

——『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第26章和訳——

引田弘道・大羽恵美

解題

1. 第26章の概要

本文に認められるクシャトリヤの誕生と王統譜は以下のとおりである。

昔、世界が大洪水の状態であった時、風に触れて、水は乳のようになり、次第に凝固し、色、味、触、音、香からなる大地となった。光音天の神々は善業が尽きて大地に降下すると、同じ姿を持った衆生が生じた。味への渴望から惑乱して親指で衆生が味を賞味すると、食物の持つ毒のため、ひどく肌が荒れ、彼らは色あせてしまった。大地は次第に彼らに食物を産み出すようになった。暗黒に打ちひしがれた彼らは土地と家とを所有した。

人々を損害から守るための、大地の守護者としてのクシャトリヤが誕生。多くの人々から是認された初めての王、マハーサンマタ王の誕生→ウポーシャダ王→マーンダートリ王→クリキ王→イクシュヴァーク、ヴィルダカ王は王子たちを追放する。王子たちはカピラ仙に囚んだ都、カピラヴァストウを王城とする。彼らはシャーキャ族と名乗る。→ダシャラタ王→シンハハヌ王→

(4王子)

シュッドーダナ (→ブッダとナンダ)

└→ラーフラ

シュクローダナ (→ティシュヤとバドリカ)

ドロノーダナ (→アニルツダとマハット)

アムリトーダナ (→アーナンダとデーヴァダツタ)

(4王女)

シュッダー (→スプラシュツダ)、シュクラ (→マーリカ)、ドロナー (→バドラーニ)、アムリター (→ヴァイシャールヤ)

2. 対応する文献

赤沼 1931: 464-466 に基いて、Ikṣvāku (Okkāka) の系譜を扱う主要な文献を列挙すると、以下の通りである。

- ① 『起世経』 (T. 24 [I] 364a11-b11)
- ② 『起世因本经』 (T. 25 [I] 419a13-b12)
- ③ 『五分律』 (T. 1421 [XXII] 101a11-b20)
- ④ 『四分律』 (T. 1428 [XXII] 779a5-b10)
- ⑤ 『仏本行集经』 (T. 190 [III] 672a12-676a68)
- ⑥ 『長阿含经』 「世记经」 (T. 1 [I] 148c23-149b3)

- ⑦ 『大樓炭經』 (T. 23 [I] 308c14–309a27)
- ⑧ 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』 (T. 1450 [XXIV] 100c9–105a24) (= 『破僧事』)
- ⑨ 『根本説一切有部毘奈耶菓事』 (T. 1448 [XXIV] 33c23–34a6) (= 『菓事』)
- ⑩ 『衆許摩訶帝經』 (T. 191 [III] 936c)
- ⑪ 『彰所知論』 (T. 1645 [XXXII] 231a10–b7)
- ⑫ 『釋迦譜』 (T. 2040 [L] 2a3–4c3)
- ⑬ Saṅghabhedavastu (*The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu. Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*, ed. by R. Gnoli, Part 1, 1977, Roma: Istituto Italiano Per il Medio ed Estremo Oriente)
- ⑭ Mahāvastu (*Le Mahāvastu*, ed. By É. Senart, 3 vols, Paris, 1882–1897)
- ⑮ Mahāvamsa (*The Mahāvamsa*, ed. By W. Geiger, PTS. 1908 (1958))

これらの文献で注目すべき点として、

1) クシャトリヤとマハーサンマタ王の誕生

クシャトリヤの語義解釈として、Avk 26.10では、

tatas teṣāṃ kṣatatrāṇāt kṣatriyaḥ kṣitipālāne /
mahāsaṃmatanāmābhūj janasya mahato mataḥ //

(そして、彼らを損害から守るために、大地を守ることからクシャトリヤが生じた。

「マハーサンマタ」という名の [クシャトリヤが] 多くの人々から [指導者として] 承認された。)

これにより、損害から守ること、大地の守護者が「クシャトリヤ」の語義解釈であり、多くの人からは認められたことから「マハーサンマタ」という名の王が生じたとある。

他の文献は次のように説明している。

まず、Aggañña-Suttanta (Dīgha-nikāya xxvii: 93. 11–16) は、以下のようにある。

Mahājāna-sammato iti kho Vāsetṭha mahā-sammato, mahā-sammato tv eva paṭhamam akkharam upanibbattam. Khetṭānam paṭiti kho Vāsetṭha khattiyo, khattiyo tv eva dutiyam akkharam upanibbattam. Dhammena pare rañjēti kho Vāsetṭha rājā, rājā tv eva tatiyam akkharam upanibbattam.

(ヴァーセッタよ、大衆に選ばれた者であることから、「マハーサンマタ」「マハーサンマタ」という呼称が最初に生じました。ヴァーセッタよ、もろもろの国土の王であることから、「カッティヤ」「カッティヤ」という呼称が第二に生じました。ヴァーセッタよ、法によって他の者たちを喜ばすことから、「ラージャー」「ラージャー」という呼称が第三に生じました¹⁾。)

ほぼ同じ内容ながら『仏本行集経』(672a24–b2) では、以下のようにある。

多くの人たちに量を決めて提供するから「大衆平等」²⁾と名付けられ、正しく統治して人々を喜ばせ、心を同じくして愛敬させたので「王」と名付けられ、全ての稲田を守護して、収穫の一部を分け前として提供させたので「刹利王」であり、クシャトリヤとは大地の主のことである³⁾。

両経に共通するのは「王」は人々を喜ばすことからそのように名付けられたという点であろう。

いっぽう、王は「光り輝く」からそう呼ばれる、とする文献もある。『起世経』(362c25–363a1) に同様の記述がある。

人々は稲田のうち幾分かをとり上げてそれを一人の守護者に分配した。これがクシャトリヤ(田主)⁴⁾である。クシャトリヤはいろいろな点で、智慧や善巧により、人々の中で最も光り輝く。このために曷囉闍(王)と名づけた。人々は選んで大平等王とした。これにより「摩訶三摩多」と名づけられた⁵⁾。

『起世因本経』(417c26-418a2) も同じ。

「喜ばす」「光り輝く」の両解釈を説く文献もある。Saṅghabhedavastu (15. 16-20) は以下のように説く。
mahājanena saṃmato mahāsaṃmata iti mahāsaṃmato mahāsaṃmata iti saṃjñodapādi / kṣetrāṇām adhipatiḥ
kṣatāc ca trāyata iti kṣatriyaḥ kṣatriya iti saṃjñodapādi / dharmeṇa prajā rañjayati, śilavṛttasamudācāreṇa
prajñāvṛttasamudācāreṇeti rājā rājeti saṃjñodapādi /

(多くの人々によって是認されたので「マハーサンマタ」, 「マハーサンマタ」つまり「マハーサンマタ」, 「マハーサンマタ」という名称が生じた。田地の主人であり, 損害から守ることにより, 「クシャトリヤ」, 「クシャトリヤ」という名称が生じた。ダルマによって人民を喜ばせ, 徳行という善行と智行という善行によって輝くので, 「ラージャー」という名称が生じた。)

対応する『破僧事』(100c9-12) にも, 「衆既同意。立為地主。故得大同意名。能擁護劣弱。故得利帝利名。如法治国。能令治国。能令一切衆生歡喜。戒行智慧。故号为大同意王」とある。

「世記経」(148c26-29) は最初の王の名前の由来のみを説く。

「私たちは今君を主人にしようと思う。立派に人々を守り, よいことを褒め, 悪を罰して下さい。私たちはみんなで, それぞれの蓄えを割いて, これを与えよう」と人々は一人の立派な人に言った。その人はこれを聞くと, すぐに承諾して王となり, 褒めるべき者は褒め, 罰すべき者は罰した。初めて「民の王」という名前ができた⁶⁾とある。

ここでは, 皆が自身の蓄えを割いて王に寄付し, そこで彼は賞罰を実施したため「民の王」という名が生じたことのみ記されている。

『大樓炭経』(308c16-17) も, 「正しく税金を徴取したので「刹利」と名付けられ, 宇宙で最初にクシャトリヤ(刹利種)が生じたとする。『衆許摩訶帝経』(933c5-9) には, 田地の主としてのクシャトリヤ(刹帝利姓)とマハーサンマタ王(三摩達多王)と一緒に説かれている。

いっぽう, Mahāvastu (III: 348. 3-7) はクシャトリヤや王に対する独特の語源解釈をしている。

mahatā janakāyena saṃmato ti mahāsaṃmato ti saṃjñā udapāsi / arahati śālikṣetreṣu śālibhāge ti rājā ti saṃjñā udapāsi / samyak rakṣati paripāleti mūrhdhnābhiṣiktaḥ ...saṃjñā udapāsi / mātāpitr̥samo naigamañānapadeṣu ti jānapadasthāmavīryaprāpto ti saṃjñā udapāsi // tenāham rājā kṣatriyo mūrhdhnābhiṣikto janapadasthāmavīryaprāpto ti //

(多くの人によって是認されたから「マハーサンマタ」という名称が生じた。稲田における稲の分け前に値するから, 「王」という名称が生じた。正しく守り, 守護するから「灌頂を受けた[クシャトリヤ]」という名称が生じた。町や国の人たちに対して[自身の]父母と同等にしたので, 「国土を安穩に至らしめた者⁷⁾」という名称が生じた。それゆえ, 「私は王で, 灌頂を受けたクシャトリヤで, 国土を安穩に至らしめた者」なのである。)

以上より Avk は王の解釈がない点を除けば, Saṅghabhedavastu の記述に一番近いことが分かる。特に「田地の主」の解釈の外に, 「損害から守る」という解釈は Saṅghabhedavastu にしか認められず, 両者の近さを物語っている。これに対して Avk と遠い存在は Mahāvastu であろう。

2) カピラヴァストゥ都城の造立とシャーキャ族の名前の謂れ

Mahāvastu (III: 348. 10-352. 8) は, カピラヴァストゥ都城の造立とシャーキャ族のいわれを記している。大都城シャーケート(Śāketa)での最後の王, スジャータ(Sujāta)という名のイクシュヴァーク(Ikṣvāku)の王がいた。彼にはオプラ(Opura)・ニプラ(Nipura)・カラカングダ(Karakaṅḍaka)・ウルカームカ(Ulkāmukha)・ハスティカシールシャ(Hastikaśīrṣa)という五人の息子と, シュツ

ダー (Śuddhā)・ヴィマラー (Vimalā)・ヴィジター (Vijitā)・ジャラー (jalā)・ジャリー (Jalī) という五人の娘がいた。彼と愛人のジェンティー (Jentī) の間にはジェンタ (Jenta) という名の息子がいた。王国を自分の息子に継がせたいとする愛人にそそのかされた王は五人の王子たちを都から追放した。王子たちは王女たち、さらには多くの国の人たちを連れて、ヒマラヤ山麓に住むカピラ (Kapila) 仙の庵に (āśramapadam) 向かい、近くのシャーコータ樹の森に (śākoṭavanakhaṇḍe) 住んだ。その時、王子たちは「我々の血統の汚染があってはならない」と思い、血の汚染への恐れから、それぞれ自分と同じ母から生まれた姉妹を互いに別の王子に嫁がせた⁸⁾。これは血統汚染を恐れた兄弟婚である。スジャータ王は宮廷祭官や他のバラモンの賢者たちに「それらの王子たちが為したようなこと (兄弟婚)、そのようなことをすることは可能か」と尋ねた⁹⁾。可能だという返事もらった王は「諸君、王子たちは有能だ¹⁰⁾」という喜びの言葉を発した。王子たちが「有能」であったため、「シャーキャ」という名前が生じた。カプラ仙は水の入った瓶を手にもって水を流して仙人の財産 (庵) を王子たちに与えた¹¹⁾。王子たちは仙人の庵を宮殿にしたのちに都城を造立した。「カピラ (Kapila) が与えた財産 (vastu)」がカピラヴァストウ (Kapilavastu) の謂れである。いっぽう、Saṅghabhedavastu (26. 11-32. 5) は、以下のように説く。

イクシュヴァーク王譜の名の由来¹²⁾、都城ポータルラカで101代の王が続き、その最後の王ヴィルダカ (Virūḍhaka) にウルカームカ (Ulkāmukha)・カラカルニン (Karakarṇin)・ハスティニヤンサ (Hastiniyamsa)・ヌープラカ (Nūpuraka) の四人の王子がいた。その後、第一王妃 (agramahisī) が無亡くなり気持ちが塞いでいる王を慰めようと、臣下たちは他の国王の王女を妃として迎えようとした。その王は使者に「もし私の娘が男子を産めば、彼を王権の支配者に据える、という条件で [娘を] 与えよう¹³⁾」と言った。ただ既に四人の長兄がいるため、「諸君、どうしたら穢れも無く罪もない王子たちは追放されようか¹⁴⁾」と困っている王を助けるべく臣下たちは一計を案じて、彼らを王国から追放した。その後それらの王子たちはそれぞれの妹を伴って次第に [進み行き]、ヒマラヤ山の麓のガンジス河の岸にいるカピラ仙 (Kapila) の庵からほど近いところに到着した。彼らはそれぞれ母の異なる妹らを娶り、多くの息子や娘たちが誕生した。カピラ仙は彼らのおしゃべりという煩わしさにより瞑想に心を専念することが出来なかった¹⁵⁾。彼らに別の土地を与えようと、その [仙人] は黄金の瓶を持って都城の形に、水を流しながら都城 [の寸法] を測らせた。カピラ仙によって彼らが住むための財物 (土地) が捨施されたのでカピラヴァトウ、カピラヴァストウという名称が生じた¹⁶⁾。彼らは都城を切りもりしていたので、王は「実に王子たちは有能だ。実に王子たちはとても有能だ¹⁷⁾」と言った。

『葉事』(33c23-34a6) は、甘蔗王による炬面・長耳・象肩・足釦の四王子の追放と劫比羅仙の草庵への訪問、互いに別の妹との結婚、王子たちが極能の故に釈迦という名称が生じた点を説くが、カピラヴァストウの由来は説いていない¹⁸⁾。その他、中村 1992: 62-74を参照。

3) デーヴァダッタとアーナンダの両親

Avk では、シンハハヌ王に、シュッドーダナ、シュクローダナ、ドロノーダナ、アムリトードナの四王子がおり、彼らからそれぞれ、ブッダとナンダ、ティシュヤとパドリカ、アニルグダとマハット、アーナンダとデーヴァダッタが生まれたとする。さらにシンハハヌ王には、シュッダー、シュクラ、ドロナー、アムリターの四王女がおり、彼女らからそれぞれスプラシュッダ、マーリカ、パドラニ、ヴァイシャーリヤが生まれたとする。さらにブッダからラーフラが生まれた。

この研究に関して、森・本澤 2006: 3-18はデーヴァダッタと釈尊との関係を中心としながらも、釈

尊とアーナンダとの関係や、釈尊を取り巻く姻戚関係を列挙している。この研究を中心として、Avk の記述と他の文献とを対比すると、いくつかのタイプに分類されることが判明する。

第1のタイプは『起世経』(364a28-b8)、『起世因本经』(419a29-b9)に見られるものである。『起世经』によると、

智弓王に師子頰と師子足の二王子がおり、前者が王位を継いだ。彼の王に浄飯、白飯、斛飯、甘露飯の四王子と甘露という名の王女がいた。四王子から、それぞれ悉達多と難陀、帝沙と難提迦、阿泥婁駄と跋提梨迦、阿難陀と提婆達多が生まれ、甘露王女から世婆羅が生まれた。悉達多の子は羅睺羅である。

ここでは、アムリトードナからアーナンダとデーヴァダッタが生まれたとする。また四王子の他に甘露王女がいる¹⁹⁾。

第2のタイプは『衆許摩訶帝经』(937b29-c12)に見られるものである。

牢弓王に星賀賀怒王と師子吼王の二王子がおり、前者に浄飯王、白飯王、斛飯王、甘露飯王の四王子がいた。四王子からそれぞれ、悉達多と難陀、娑帝疎嚕と娑捺哩賀、摩賀囊麼と阿爾樓駄、阿難陀と提婆達多が生まれ、さらに四王子にはそれぞれ、蘇鉢囉、怛囉摩黎、跋捺黎、細嚕羅の王女が生まれた。悉達多の子は羅怛羅である。

シンハハヌ王から四王子が生まれ、彼らのうちのアムリトードナからアーナンダとデーヴァダッタが生まれたことは第1のタイプと共通しているが、ここでは四王子からさらに四王女が生まれたという記述がある。

第3のタイプは『五分律』(101b15-20)に見られるものである。

尼休羅に浄飯、白飯、斛飯、甘露飯の四王子がいた。四王子からそれぞれ、菩薩と難陀、阿難陀と調達、摩訶男と阿那律、娑婆と跋提が生まれた。菩薩の息子は羅睺羅である。

ここではアーナンダとデーヴァダッタが生まれたのはアムリトードナではなく、シュクロードナからだとする。

第4のタイプは『大智度論』(T. 1509 [XXV] 83b26-c3, 313b24-25)に見られるものである。

日種王の師子頰に浄飯、白飯、斛飯、甘露飯の四王子と甘露味という名の王女がいた。四王子からそれぞれ、仏と難陀、跋提と提沙、提婆達多と阿難、摩訶男と阿泥盧豆が二人ずつ生まれ、甘露味王女から施婆羅が生まれた。(83b26-c3)

提婆達多は阿難の兄であると記されている²⁰⁾。(313b24-25)

ここでは、ドロノードナからデーヴァダッタが兄、アーナンダが弟として生まれたとある。甘露味という名の王女がいることは第1のタイプと共通する。

第5のタイプは Mahāvastu (III: 176. 13-177. 3)に見られる。

rājño śuddhodanasya bhagavāṃ ca putro suṃḍaranando ca / śuklodanasya putrā ānaṃdo ca upadhāno ca devadatto ca /.... śukrodanasya putrā nandano ca nandiko ca ete abhiniṣkramanti / apare ca duve putrā grhe sthitā // amṛtodanasya putrā anuruddho ca mahānāmo ca bhaddiko ca //

(シュドードナ王に世尊とスンドラナンダという息子がいた。〈中略〉シュクロードナ (Śuklodana) には、アーナンダ、ウパダーナとデーヴァダッタがいた。〈中略〉シュクロードナ (Śukrodana) の息子たちは、ナンダナとナンディカが出家し、他の二人の息子たちは家に残った。アムリトードナには、アヌルダ、マハーナーマ、バツティカという息子たちがいた²¹⁾。)

ここではシュクロードナから、アーナンダ、ウパダーナ、デーヴァダッタが生まれたとする。

第6のタイプは Saṅghabhedavastu (31. 21-32. 5)に見られるものである。

siṃhahanor gautamā catvāraḥ putrāḥ, śuddhodanaḥ, śuklodanaḥ, droṇodanaḥ, amṛtodanaḥ; śuddhā, śuklā,

droṇā, amṛtikā ceti duhitarah; śuddhodanasya dvau putrau, bhagavān āyuṣmāṃs ca nandah; śuklodanasya dvau putrau, āyuṣmāṃs ca tiṣyo, bhadrakās ca śākyarājah; droṇodanasya dvau putrau, mahānāmā, āyuṣmāṃs cāniruddhaḥ; amṛtdanasya dvau putrau, āyuṣmān ānando devadattaś ca; śuddhāyāḥ suprabuddhaḥ putraḥ; śuklāyāḥ putro māli; droṇāyā bhāddālī; amṛtikāyāḥ śaivalaḥ bhagavato rāhulaḥ putra iti gautamā rāhule mahāsaṃmatavaṃśaḥ pratiṣṭhitaḥ;

(ガウタマらよ、シンハハヌ王に、シュッドーダナ、シュクローダナ、ドローノーダナ、アムリトーダナの四王子と、シュッダー、シュクラ、ドローナー、アムリティカーの〔四〕王女がいた。シュッドーダナには、世尊と具寿ナンドの二人の息子たち、シュクローダナには具寿ティシュヤとシャーキヤ族の王バドラカの二人の息子たち、ドローノーダナには、具寿アニルダとマハーナーマンの二人の息子たち、アムリトーダナには、具寿アーナンダとデーヴァダッタの二人の息子たちが〔いた。〕シュッダーには息子のスプラシュダ、シュクラには息子のマーリン、ドローナーにはバーダーリン、アムリティカーにはシャイヴァラが〔生まれた〕。世尊には息子のラーフラがいた。ガウタマらよ、以上のように、マハーサンマタの系譜はラーフラで終了した。)

『破僧事』(T. 1450 [XXIV] 105a9-105a22) も同様である。

堅弓王に師子頰と師子吼の二人の王子がおり、前者が王位を継いだ。彼の王に浄飯、白飯、斛飯、甘露飯の四王子と、清浄、純白、純斛、甘露という名の四王女がいた。四王子から、それぞれ薄伽梵と難陀、恒星と賢善、大名と阿那律、慶喜と天授が生まれ、四王女からそれぞれ、善悟、有鬘、勝力、大力が生まれたとする。薄伽梵の息子は羅怛羅である。

ここでは、シンハハヌ王から四王子と四王女が生まれ、アムリトーダナからアーナンダとデーヴァダッタが生まれ、さらに四王女からそれぞれ一人ずつ息子が生まれたとあり、Avk の内容に類似した姻戚関係を説いている。

以上の北伝の資料よりアーナンダとデーヴァダッタは、両者の父、兄弟の順こそ違い、同一の父から生まれた兄弟であり、釈尊とは父方の従弟であることが分かる。また Avk と類似した親戚関係は Saṅghabhedavastu (『破僧事』) に認められる。これに対して南方の伝承では、デーヴァダッタとアーナンダとは兄弟ではなく、釈尊と同様母方の従弟である。Mahāvamsa II. 15-24 (13. 15-14. 18) に次のようにある。

カピラヴァットゥ (Kapilavatthu) にサーキヤ族の王 (Śākyarājā) がいた。師子頰 (Sīhahanu) 大王はジャヤセーナ (Jayasena) の実子で、ジャヤセーナの王女はヤソダラー (Yasodharā) といった。またデーヴァダハにはサッカ族のデーヴァダハ (Devadahakka) と名づける王がおり、アンジャナ (Añjana) とカッチャナー (Kaccānā) という二人の王女がいた。カッチャナーは師子頰の王妃となり、ヤソダラーはサッカ族のアンジャナの王妃となった。アンジャナにはマーヤーとパジャーパティーという二人の娘がおり、サーキヤ族のダンダパーニ (Daṇḍapāṇi) とスッパブッダ (Suppabuddha) という二人の王子がいた。師子頰には五人の王子と二人の王女がおり、スッドーダナ (Suddhodana), ドートーダナ (Dhotodana), サッコーダナ, スッコーダナ, アミトーダナ (Sakkasukkāmitodana) とアミター (Amitā), パミター (Pamitā) である。アミターはサッカ族のスッパブッダの王妃となり、彼女にバッドカッチャナー (Bhaddakaccānā) とデーヴァダッタ (Devadatta) の二児がいた。マーヤーとパジャーパティーはスッドーダナの妃となり、我らの勝者はスッドーダナとマーヤーの子である。バッドカッチャナーはシッダッタ王子の王妃で、ラーフラ (Rāhula) は彼女の子である。

両伝のうち、どちらが史実に即しているのであろうか。森・本澤 2006: 11 は、アーナンダとデーヴァダッタを同一の父から生まれたとすると、家督を誰が相続するかの問題が生じるので、両者が共に出家するのは現実的ではないとする。むしろ、両者は母方の従弟同士であったとする南伝の方がすっきりとしよう。この出家と家業相続の問題は、『増一阿含』(T. 125 [II] 623c6-23)にも次のように説かれている。

世尊は迦毘羅衛城に帰って、真浄王に説法し、法眼浄を得させた。その時王は「兄弟二人の子がいる者は一人を出家させるべきである。従わない者は重罰を科す」と国中に布告した。これを聞いた提婆達兜釈種は阿難釈に言う。「真浄王今日有教。諸有兄弟二人当分一人作道。汝今出家学道。我当在家修治家業」と。その時、阿難釈は歡喜踊して「兄の来て教える通りです」と答えた。

さらに Mahāvastu の先述した箇所にも同様にある。

「[世尊とスングラナダ兄弟のうち] 世尊が出家したので、スングラナダは[出家を]免れた²²⁾。」「彼ら(アーナンダとデーヴァダッタ兄弟)のうちデーヴァダッタが出家した。アーナンダも出家したかったが、シャーキャ族の女である母のムリギーは許可しなかった²³⁾。」「[アヌルダ、マハーナーマ、パッティカ兄弟のうち] マハーナーマはアヌルダに尋ねた。『汝は出家するつもりか、あるいは家業に心を砕くつもりか』と²⁴⁾。』

なお、シャーキャ族の系譜は、中村 1992: 772-776にもまとめられている。

3. 韻律

本章を構成する詩節の韻律は以下の通りである。ただし、韻律 *anuṣṭubh* の偶数句は原則として正規形 (*pathyā*) なので省略する。

anuṣṭubh: 2-26

pathyā: 3ac, 4ac, 5c, 6c, 7ac, 8a, 9ac, 10ac, 11a, 12ac, 13a, 14ac, 15ac, 16ac, 17ac, 18ac, 19ac, 22a, 24c, 25a, 26ac (68%)

na-vipulā: 2a, 5a, 6a, 11c, 13c, 20c, 21c, 22c, 23c, 24a (20%)

bha-vipulā: 21a (2%)

ma-vipulā: 2c, 8c, 23a (6%)

ra-vipulā: 20a, 25c (4%)

vasantatilakā: 1

indravajrā: 27

参考文献

Jātm *The Jātaka-mālā: Stories of Buddha's Former Incarnations, Otherwise Entitled Bodhisattva-Avadhāna-Mālā by Āryaśūra*, Ed. H. Kern. Harvard Oriental Series Vol. 1, Cambridge Massachusetts: Harvard University Press, 1914. Reprint: Delhi: Indological Book House, 1972.

Kajihara, Mieko 2014 "Seizing the Novice's Hand and Pouring Water into His Hands at the Vedic Initiation Ritual" *Studies in Indian Philosophy and Buddhism* 21: 1-18.

Rijal, Babu Krishna 1979 *Archaeological Remains of Kapilavastu, Lumbini and Devadaha*, Kathmandu: Educational Enterprises (Pvt) Ltd.

赤沼智善編 1931『増補版 印度固有名詞辞典』法蔵館。

片山一良 2005『パーリ仏典〈第2期〉5 長部(ディーガニカーヤ)パーティカ篇 I』大蔵出版。

辛嶋静志 2001『『大阿弥陀經』訳注(三)』『佛教大学総合研究所紀要』8: 133-146。

- 雲井昭善 1997『新版 パーリ語佛教辞典』山喜房佛書林, (2008).
杉本卓洲 1978「迦葉仏の塔」『印度學佛教學研究』27-1: 202-206.
土田龍太郎 1985「釈迦族の系譜」『日本仏教学会年報』50: 101-111.
中村元 1992『中村元選集〔決定版〕第11巻 ゴータマ・ブツダ I』春秋社.
引田弘道 2005『『世記経』世本縁品(二)解説, 本文, 注』丘山新他『現代語訳「阿含経典」長阿含経』平河出版社, 6: 69-71, 325-241, 509-529.
平岡聡 2010『ブツダの大いなる物語 下』大蔵出版.
森章司・本澤綱夫 2006「提婆達多の研究」『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究【11】個別研究篇 III』「中央学術研究紀要」モノグラフ篇 No. 11, 中央学術研究所, 1-114.
森雅秀 1990「インド密教儀礼における水」『国立民族学博物館研究報告』15-4: 1013-1047.

和 訳

功德ある行為を行える者の出自は、善を行うに相応しい偉大な家系

清浄な光で示された素晴らしい輝きのある、真珠からなる宝石のような、世間の人たちを飾りたてる、
功德の蓄積にふさわしい美しい振る舞いを行う人は、
誰であれ、善と結びついた偉大な血統の人である。(1)

釈迦族の人たち、自身の血統を如来に尋ねる

以前に、カピラヴストゥ (Kapilavastu)²⁵⁾のニャグローダ (nyagrodha-) を楽しまれている世尊如来に
釈迦族の人たちが (Śākyaḥ) 自らの血統を尋ねた。(2)
彼らによって自らの血統の起源を尋ねられると、その方は目連の面前で、
その目連の汚れなき智をご覧になり、[彼に] 話すようを命じられた。(3)
彼 (目連) は智慧の眼をもって過去を正しく観察したのち²⁶⁾,
「釈迦族の成り立ちを注意深く聞きなさい」と彼らに言った。(4)

世界と人類の始まり

以前にこの世界が残らず水だけの、大洪水であった時、
風に触れることから、水は牛乳のようになった²⁷⁾。(5)
その水が徐々に濃くなり固まると、
色、味、触、音、香からなる地となった²⁸⁾。(6)
業が尽きることにより、光音天の神々²⁹⁾がそこ (大地) に降下し、
彼ら (神々) と同じ姿を持つ³⁰⁾, より優れた心 (sattva-) と力のある衆生が (sattvāḥ) 生まれた。(7)
それ (味) への渴望で激しく惑わされ、親指で味を賞味すると³¹⁾,
食物の持つ毒のため、ひどく肌が荒れ、色あせてしまった。(8)
大地は次第に彼らに食物を産み出すようになった。
暗黒によって打ちひしがれた者たちは土地と家とを所有した³²⁾。(9)

王族の誕生と系譜

彼らを損害から守ることから (kṣata-trāṇāt) 指導者³³⁾であり、大地を (kṣiti-) 守ることからクシャトリヤ (kṣatriyaḥ) が生じた³⁴⁾。
「マハーサンマタ」(Mahāsammata-) という名の [クシャトリヤが] 多くの人々から [指導者として]

承認された³⁵⁾。(10)

彼の偉大な家系に栄えあるウポーシャダ王 (Upoṣadha) がいた。

[彼は] 萎れることのない名声の花であり、海における珊瑚樹 (pārijāta) のようであった。(11)

彼の息子は、母胎より生まれたのではない、転輪聖王マーンダートリ (Māndhātṛ, 頂生) であった。

世間の人々に対する唯一の日傘である彼の家系は偉大なものとなった。(12)

千もの子孫ある彼の家系に³⁶⁾、クリキ王 (Kṛki) が生まれた。

世尊カーシャパ (Kāśyapa) [仏] は彼 (クリキ王) の心を清らかにした (cittaprasādam)³⁷⁾。(13)

彼 (クリキ) の子孫にイクシュヴァーク (Ikṣvāku) が生まれ、彼 (イクシュヴァーク) の [子孫] にヴィルダカ (Virūdhaka) が生まれた。

年下の子供 (末子) への愛情のために、長兄たちは彼 (ヴィルダカ) によって追放された。(14)

カピラヴァストウの都とシャーキャ (釈迦) 族の誕生

その後、すべての王子たちは心を合わせて、故郷に対する執着を捨て、

カピラ (Kapila-) と呼ばれる大仙の庵所 (アーシュラマ) に赴いた。(15)

子供であるために、彼らが大声でおしゃべりをし、[大仙の] 瞑想の時間を邪魔したため、

彼 (大仙) は別の場所にカピラヴァストウ³⁸⁾という名の都を [彼らのために] 造営した。(16)

しばらくして、息子たちへの愛情のために、後悔して、

「それらの王子たちを連れて来なさい」と王は大臣たちに言った。(17)

すべての大臣たちは彼 (王) に言った。「王様、彼らは最上の都を手に入れました。

彼らを連れ帰ることは出来ません。[彼らには] 子孫や大いなる繁栄が生じました」と。(18)

このように彼らの父がそのこと (連れ帰ること) に対して出来ることと (śākya-) 出来ないこと (aśākya-) を考えたので、

彼らはシャーキャ (Śākya, 釈迦) という名となり、彼らの家系を繋ぐ王都が [彼らのものと] なった。(19)

シャーキャ族の系譜

その王たちの系譜が五万五千代にわたって過ぎると、

高貴なダシャラタ王 (Daśaratha) が生まれた。(20)

彼の子孫にシンハハヌ (Simhahanu)³⁹⁾王がいた。

というのも、象たちが獅子に耐えられないかのように、

王たちは戦場で彼に [耐えられなかった] からである。(21)

世尊の縁者

彼の息子として、長子のシュッドーダナ (Śuddhodana), 次にシュクローダナ (Śuklodana),

彼の次にドロノーダナ (Droṇodana) がおり、末子にアムリトーダナ (Amṛtodana) がいた。(22)

[彼の] 四人の姉妹たちは、シュッダー (Śuddhā) と呼ばれ、シュクラ (Śuklā), ドローナー (Droṇā), アムリター (Amṛthā) である。

シュッドーダナの息子が世尊 (Bhagavān) であり、もう一人がナンダ (Nanda) である。(23)

シュクローダナの二人の息子はティシュヤ (Tiṣya) と呼ばれる者とバドリカ (Bhadrika) であり、

ドロノーダナに二人の息子アニルダ (Aniruddha) とマハット (Mahat) がいた。(24)

アーナンダ (Ānanda) とデーヴァダッタ (Devadatta) と呼ばれる二人はアムリトーダナから生まれた。

シュッターの息子がスプラシュッタ (Suprasuddha) であり、シュクラの息子がマーリカ (Mālīka) である。(25)

ドロナーの息子がバドラーニ (Bhadraṇi) であり、アムリターの息子がヴァイシャルヤ (Vaiśālya) と呼ばれる。

世尊の息子がラーフラ (Rāhula) であり、彼で [シャカ族の] 家系が終了した⁴⁰⁾。(26)

シャーキャ族たちは自身の系譜を聞くと、心が清らかとなる

このように輝く知識を持つ彼 (目連) によって、ありのままに語られた [シャーキャ族の] 系譜を聞くと、

シャーキャ族たちは世尊の威光によって特別な卓越性が生み出され、清らかとなった。(27)

註

- 1) 片山 2005: 188.
- 2) 本文には「章」とあるが、ここでは三本に従って「等」と読んだ。
- 3) 以為大衆商量拏故。故号彼為大衆平等。又彼地主。為諸大衆。如法治化。令衆歡喜同心愛樂。……故名為王。又復守護一切稻田。熟取衆人。稻田分故。名利利王。利利王者。名為田王。
- 4) 括弧 () の中は割注。
- 5) 以從衆人稻田之中取地分故。因即名為刹帝利。時諸衆生歡喜依教奉行。彼刹帝利。於衆事中。智慧善巧。處於衆中。光相最勝。是故復名為曷囉闍。大衆立為平等王。是故復名摩訶三摩多。
- 6) 衆人語言。我等今欲立汝為主。善護人民賞善罰惡。當共減割以相供給。其人聞之。即受為主。應賞者賞。應罰者罰。於是始有民主之名。
- 7) 原語の janapadasthānaviryapṛāṭha は対応するパーリ語では janapadatthāvariyaṭṭa であり、転輪聖王の特色とされる。Dighanikāya (*The Digha Nikāya*, ed. By T. W. Rhys Davids and J. E. Carpenter, PTS., 1890 (1967)) I: 88. 34–89. 3. -thāvāriya- は thāvāra (Vedic. sthāvāra) の派生語。雲井 1997: s.v., janapadatthāvariyaṭṭa を参照。
- 8) tehi dāni kumārehi mā mo jātisamdoṣaṃ bhaviṣyatīti jātisamdoṣabhayena svakasvakā yeva mātryo bhaginiyo parasparasya vivāhita / (351. 2–4)
- 9) śakyā evam evam kartuṃ yathā tehi kumārehi kṛtaṃ // (351. 10–11)
- 10) śakyā punar bhavanto kumārā // (351. 13)
- 11) ṛiṣiṇā taṃ vastuṃ teṣaṃ kumārāṇāṃ karakaṃ grhya udakena dinnaṃ // (352. 3) 水を流すことは契約が確実に実行されることを意味する。Viśvaṃtarajātaka (Jātm 62. 7–9). Cf. Kajihara 2014: 12, 森 1990: 1015–1014.
- 12) tais taṃ riṣim anujñāpya tayor jyeṣṭhaḥ kumāro rājyābhīṣekenābhīṣiktaḥ; so 'py aputraḥ kālagataḥ; tato 'sau dvitīyaḥ kaniyān abhīṣiktaḥ; tasya ikṣvākṛāja ikṣvākṛāja iti saṃjñā saṃvṛttā; Saṅghabhedavastu (26. 11–14). 子供がいなくて亡くなった兄の跡を弟が継いで王譜を守ったことが、節のある砂糖黍の形状に喩えたものか。
- 13) « ...kiṃtu samayato 'nuprayacchāmi, yadī me duhituḥ putro bhavati, taṃ yadī rājayaiśvaryādhipatyē pratiṣṭhāpayati » Saṅghabhedavastu (27. 11–14) 「汝王若欲与我為親。應先与我立於盟信。我女有息必令紹位。」『破僧事』(103c18–19)。
- 14) « bhavantaḥ katham adūṣiṇo 'napakāriṇaḥ kumārā nirvāsyaṃte » Saṅghabhedavastu (28. 16–17) 「我之四子先無愆過。如何棄之令出国外。」『破僧事』(104a13–14)。
- 15) kapilariṣiḥ śabdakaṇṭakatvāt dhyānānāṃ cittaikāgratāṃ nārāgayati; Saṅghabhedavastu (30. 4) 「因茲便生誼鬧。仙見是已心不得定。」『破僧事』(104c2–3)。
- 16) tena sauvarṇaṃ bhṛṃgāraṃ ādāya nagarākāreṇa udakadhārāpātair nagaraṃ māpitam; kapilena riṣiṇā teṣaṃ vāsāya vastu parityaktam iti kapilavastu kapilavastv iti saṃjñā saṃvṛttā; Saṅghabhedavastu (30. 9–12) 「即持金瓶盛滿中水。詣余好處洒水為界。……彼仙人灑水為界。因此立名。為劫比羅城」『破僧事』(104c8–11)。
- 17) śakyā bata kumārāḥ; paramasākyā bata kumārā iti ... śakyā iti saṃjñā saṃvṛttā. Saṅghabhedavastu (31. 5–6) 「我子大能。我子大能。由大威德言大能大能故。得釈迦名。」『破僧事』(104c22–23)。
- 18) その他, Rijal 1979: 2 は Sumaṅgalavilāsini 1: 284–286, Suttanipātaṭṭhakathā II: 172–173 にもこの物語があると指摘する。

- 19) 『彰知論』(231b1-7) もほぼ同じ内容を説く。
- 20) 爾時阿難聞已涕泣白仏。我兄欲死願仏哀救。
- 21) 平岡 2010: 301を参照。
- 22) bhagavatā pravrajitena sundaranamdo muccati // (Mahāvastu III: 176. 14-15)
- 23) teṣāṃ devadatto abhiniṣkramati // ānando pi icchati pravrajitūṃ mātāye mrgīye śākyakanyāye nānujānīyati // (Mahāvastu III: 176. 15-16)
- 24) anuruddho ca mahānāmena pṛcchīyati / kiṃ tvam pravrajīsyasi gṛhakāryaṃ vā cintayīsyasīti // (Mahāvastu III: 177. 3-4)
- 25) 原語は kapilavāstu。パリー語 kapilavatthu に対応するサンスクリット語は雲井 1997: s.v., kapilavatthu によれば kapilavastu と kapilavāstu との 2 種類あるが、ここでは de Jong 1996: 68 に従って kapilavastu の読みを採用した。チベット訳は, ser skya'i gzhi。
- 26) チベット訳では de yi ye shes spyen gyis ni 「彼の智慧の御目をもって」 'das pa de nyid ji bzhin gzigs 「過去をありのままにご覧になって」と敬語が使用される。
- 27) 第 4 句の原文は payaḥ paya ivābhavat。最初の payas は「水」、次の payas は「牛乳」の意味に解釈した。Saṅghabhedavastu (7. 18-23) に、次のようにある。tena khalu samayeneyaṃ mahāpṛthivī ekodakā bhavaty ekārṇavā / yaḥ khalu <ekodakāyā> mahāpṛthivyā ekārṇavāyā upari vāyunā saraḥ saṅgacchati saṃmūrchatī santanoti tadyathā payasaḥ pakvasya śītūbhūtasya upari vāyunā saraḥ saṅgacchati saṃmūrchatī santanoti / evam ekodakāyā mahāpṛthivyā ekārṇavāyā upari vāyunā saraḥ saṅgacchati saṃmūrchatī santanoti / (実にその時、大地は水だけ、大海だけとなる。[水だけの] 大地、つまり大海だけの上にある水と風とが接触すると、[水は] 凝固し拡がっていく。例えば煮られて冷えた牛乳の上の上澄みが風と触れると、[上澄み] は凝固し、拡がっていく。そのように、水だけの大地、つまり大海だけの上にある水と風とが接触すると、[水は] 凝固し拡がっていくのである。) 『破僧事』(99b14-16) にも「此之世界初成之時。爾時大地為一海水。由風鼓激和合一類。猶如熟乳。既其冷已有凝結生。其海水上亦復如是」とある。いっぽう、『世記経』「三災品」(138c-139b) には、僧伽という名の大風が起って、水を吹いて動かし、波を立て、沫を起こして積み重なる。風が吹くと自ら離れて空中にとどまり、自ら堅くなって神々の宮殿に変化する、とある。その後乱風が大きな水沫を吹き、種々の山となる、とある。「乱風」は『大阿弥陀経』にも認められる。辛島 2001: 144, (99)。チベット訳は以下は以下の通り。chu ni 'o ma bzhin du gyur / 「水は乳のようになった」。
- 28) 原文は abhūd varṇarasasparśasābdagandhamayī mahī。Saṅghabhedavastu (7. 23-24) に、次のようにある。sa bhavati pṛthivīraso varṇasampanno gandhasampanno rasasampannaḥ; (その大地のラサは色を具え、香りを具え、味を具えていた。) 『破僧事』(99b16-17) にも、「上有地味。色香美味悉皆具足」とある。
- 29) 原語は Ābhāsvara (Pali. Ābhassara)。Aggañña-suttanta (84. 27-85. 3) に以下のようにある。Saṃvaṭṭamāne loke yebhuyyena sattā Ābhassara-saṃvaṭṭanikā honti。Te tatha honti manomayā pīti-bhakkhā sayam-pabhā antalikkha-carā subhaṭṭhāyino ciraṃ dīghaṃ addhānaṃ tiṭṭhanti。Hoti kho so Vāseṭṭha samayo yaṃ kadāci karahaci dīghassa addhuno accayena ayaṃ loko vivaṭṭati。Vivaṭṭamāne loke yebhuyyena sattā Ābhassara-kāyā cavitvā ithattamā āgacchanti。Te ca honti manomayā pīti-bhakkhā sayam-pabhā antalikkha-carā subhaṭṭhāyino, ciraṃ dīghaṃ addhānaṃ tiṭṭhanti。(世界が破壊するとき、衆生はたいてい光音天に転生します。彼らはそこで意より成り、喜びを食べ物とし、自ら輝き、空中を歩き、清浄にあり、久しく長い時間とどまります。ヴァーセッタよ、いつかある時、長い時間が経過して、この世界が生じるような機会が生じます。世界が生じるとき、衆生はたいてい光音天の身体から死没して、このような状態になります。彼らは意より成り、喜びを食べ物とし、自ら輝き、空中を歩き、清浄にあり、久しく長い時間とどまります。)
- 30) 原語は -saṃbhūtāḥ であるが、de Jong 1996: 68 は -saṃbhṛtāḥ と読むべきとしている。対応するチベット訳は, rgyas 「豊かに見えた」。
- 31) Saṅghabhedavastu (8. 17-18) に次のようにある。dr̥stvā ca punas te sattvāḥ pṛthivīrasam aṅgulyagreṇa āsvādayitum ārabdhāḥ; (見るや、再びそれらの衆生は親指の先で血の味を味わい始めた。) 『破僧事』(99b22) にも「忽以指端嘗彼地味」とある。
- 32) 原語は -parigrahā であるが、de Jong 1996: 68 に従って -parigrahaḥ と修正した。
- 33) 原語は tatas であるが、de Jong 1996: 68 は netā teṣāṃ (彼らの指導者) の読みを採用すべきとする。拙訳でも彼の読みに従った。
- 34) クシャトリヤの通俗的語義解釈。

- 35) 第3, 第4句の原文は mahāsaṃmatanāmābhūj janasya mahato mataḥ //。ここでも通俗の語源解釈が認められる。
- 36) Saṅghabhedavastu (20. 15-16) に次のようにある。punar api vārāṇasyāṃ nagaryāṃ ekaśataṃ rājaśatam abhūt; (さらにペナレスの都城に101代の100人ももの王の[相承]があった。) ここでは101代となっている。『破僧事』(102a11-12) にも「波羅痾斯城子孫相承一百一代」とある。
- 37) Saṅghabhedavastu (20. 16-21. 1) に次のようにある。teṣāṃ apaścimaḥ kṛkīr nāma rājābhūt; tena khalu samayena kāśyapo nāma śāstā loke utpannah; tathāgato 'rhan samyaksambuddho vidyācaraṇasaṃpannah sugato lokavid anuttaraḥ puruṣadamyasāratih śāstā devamanuṣyānāṃ buddho bhagavān; yasya antike bodhisattvo bhagavān āyatyāṃ bodhāya prañidhāya brahmacaryaṃ caritvā tuṣite devanikāye upapannah / (彼ら[王たち]の最後にクリキ王が生まれた。ちょうどその頃、カーシャパという名前の師がこの世界に生まれた。[彼は]如来, 応供者, 等正覚, 明行具足, 善逝, 世間解, 無上, 調御丈夫, 天人の師, 覚者, 世尊であった。彼の近くで, 世尊菩薩は将来の覚りに向けて誓願を起こし, 梵行を實踐して, トウシタ天に生まれた。) ここで「世尊菩薩」は『破僧事』(102a15) では「時彼釈迦牟尼菩薩」とし, クリキ王を釈尊の前世と解釈している。釈迦譜でクリキ王を登場させるのは Saṅghabhedavastu のみであり, 他のグループには見当たらない。引田 2005: 520-523, (51)。またクリキ(クリキン)王と迦葉仏の塔との関連に関しては, 杉本 1978 を参照。
- 38) 原語は Kapilavāstuni。ただし de Jong 1996: 68 は Kapilavastuni の読みを採用すべきとする。Saṅghabhedavastu (30. 12) にも Kapilavastu とある。拙訳も de Jong の読みに従う。
- 39) 原語のシンハハヌは siṃha-hanu (ライオンを武器として持つ者) という通俗の語源解釈。
- 40) 『起世経』(364b10-11) に, 羅睺羅は阿羅漢となり, 諸煩惱を消尽したので, 彼より後には子孫は生じなかった(至羅睺羅童子身上成阿羅漢。断諸煩惱。尽生死際。更無後有) とある。

付表 サンスクリット語・チベット語人名一覧

サンスクリット語	チベット語	和 訳	Avk の記述
Mahāsaṃmata	Kun gyis bkur	マハーサンマタ	最初のクシャトリヤ
Upośadha	Gso sbyong 'phags	ウポーシャダ (王)	マハーサンマタの子孫
Māndhātā	Nga las nu	マーンダートリ (王)	ウポーシャダ王の息子
Kṛki	Kṛki	クリキ (王)	マーンダートリ王の子孫, カーシャパ仏と同時代
Ikṣvāku	Bu ram shing pa	イクシュヴァーク	クリキ王の子孫
Virūdhaka	Phags skyes po	ヴェイルーダカ	イクシュヴァーク王の子孫
Daśaratha	Shing rta bcu pa	ダシャラタ (王)	王たちの五万五千代後の シャーキヤの系譜の王
Siṃhahanu	Seng ge 'gram	シンハハヌ (王)	ダシャラタ王の子孫
Śuddhodana	Zas gtsang	シュッドーダナ (王)	シンハハヌ王の長子
Śuklodana	Zas dkar	シュクローダナ	シンハハヌ王の次男
Droṇodana	Bre bo zas	ドローノダナ	シンハハヌ王の三男
Amṛtodana	Bdud rtsi zas	アムリトダナ	シンハハヌ王の末子
Śuddhā	Gtsang (ma)	シュツダー	シンハハヌ王の娘
Śuklā	Dkar (mo)	シュクラ	シンハハヌ王の娘
Droṇā	Bre pa (/bo)	ドローナー	シンハハヌ王の娘
Amṛthā	Bdud rtsi	アムリター	シンハハヌ王の娘
Bhagavān	bcom ldan 'das	世尊	シュッドーダナ王の息子
Nanda	Dga' bo	ナンダ	シュッドーダナ王の息子
Tiṣya	Skar rgyal	ティシュヤ	シュクローダナの息子
Bhadrika	Bzang ldan	バドリカ	シュクローダナの息子
Aniruddha	Ma 'gags	ア Nil ッダ	ドローノダナの息子
Mahat	Chen po	マハット	ドローノダナの息子
Ānanda	Kun dga' bo	アーナンダ	アムリトダナの息子
Devadatta	Lhas byin	デーヴァダッタ	アムリトダナの息子
Supraśuddha	Legs par rab rtogs	スブラシュツダ	シュツダーの息子
Mālīka	Phreng ba can	マーリカ	シュクラの息子
Bhadrāṇi	Bzang po	バドラーニ	ドローナーの息子
Vaiśālyā	Yangs pa can	ヴァイシャールヤ	アムリターの息子
Rāhula	Sgra gcan 'dzin	ラーフラ	世尊の息子